蛇物語

四斗樽の中から子供の悲鳴
血みどろの蛇が這ひ出したり

永代知美代

妙樽の中へ押込める

世の中には滑分思ひ切つて邪惡なものがあるものです。おまけにそれが女なのだから堪らない。

此頃の夕刊に出てゐた――四國の何處であつたか、それとも滅はまた、名古屋あたりの田舍であつたか、ともあれ大分草深い農村の出來事のやうにおぼえてゐます。

今年十一になる男の兒と云へば、宅の坊やより二つ上の、まだやつと尋常小學校の四年生か五年生のいたいけ盛りです。嬉らまゝつ兒青ちの、つちい慈しい境遇にしたところで、憂いもつらいも、ほんのうやむやであるべき筈、それが學校の授業中に、ともすれば涙勝ちに、放課後のわれ先きに校門を飛び出す仲間に外れてたつた一人きり、いつまでもしぶくつては其處いちの下駄箱や、門の柱にもたれたまゝ、何かしら氣ずまぬさまに、考へ込んだり、すゝりないたり。

その日もその兒はしく〳〵すゝり泣いて、何時までも何時までも校門を去り難てにしてゐたさうですが、毎度の事とは云へ、受持ちの教師も不思議と見紛れるやうな胸騒ぎを感じましたとか。

『繼母に叱られて、ひどい目に逢はされるのがつらくて泣くのぢやあるまいか。』

さう思ふと矢も楯も堪らなくなつて、教師は學校の歸りを、わざ〳〵その兒の家へと廻つて見た。

絶へ入るやうな叫聲

すると果してその兒の泣き聲が聞えます。何處かでヒーヒー絶え入るやうな聲が聞えます。周章て入つて、兎もあれ詫言をしやうとしたのだが、家の中には誰もゐなかつた。それだのに家の何處かで泣き聲がする、而もその泣き聲がたゞではなかつた。

細い、無い、絶え入るやうなかぼそい聲ではあるけれど、ヒーヒーと聞く者の體中を突き刺すやうな鋭さであつた。

『〇〇君何處だ、何處だ！』

夕刊は至當簡單で、突しい事は書いてないけれど、恐らく教師は斯うその兒のお母を呼んで、そこいらを探し廻つたことでせう。

『オヤー！』

教師は驚ろいた、どろんこの馬鈴薯や百姓道具のころがつた雜嗜い土間の隅っこに置かれた四斗樽から、ヒーヒーと例の突き刺すやうな泣き聲が聞えて來ます。駆け寄つて耳を押つけて聞いて見るまでもない聲は矢張り樽の中からに相違なかつた。

『可哀相に！〇〇君しっかりしてゐるよ、先生が今あけてやる！』

口唇の色まで眞蒼に

あんやらやつと力の限りそのふたを押開けた教師は二度吃驚！全く以て呆れ返つて度をうしなはざるを得なかつた。

其處にはニョロ、ニョロと長いのが氣味惡く鎌首を持上げて、而も二匹、三匹、今にも教師の方へと飛び掛つても來さうにした。

『ヒヤー！』

でも教師は怖いの、氣味が惡いのと云つてはゐられなかつた。樽の中には今の今まで蛇責めにされてゐた子供がゐます。急いで引き出して見ると、可哀相にその兒はもう恐怖に眼も上すつて、口唇の色まで眞蒼でした。

おまけに何と云ふ殘酷さでせう、着物を脱がせて素裸にされた二の腕から太股から、長いのが幾匹となく巻きついてゐたと云ふ――

夕刊を讀んだだけで、蛇嫌ひな私は身の毛がよだつた。

『酷い奴！酷い奴！そんな奴こそ蛇責めにして思ひきりいぢめてやると好いわ、村の者は何て云つたでせう？』

憤慨屋の從妹はむきになつて力み立つた。

『れえ姉さん、そんな奴こそどんなものだが、自分で蛇責めにされて見るがいゝぢやありませんか』

日向きむこ子さン

立膝で蛇を眺めながら

從妹は又しても憤らしくつて堪らなさうに云ふのでしたが、田端のお邸に蛇を飼つてらしつたと云ふ、もとの日向夫人を連想して見たり、クレオパトラの最後の光景を思つたりしてゐた私は、何だかその繼母が恐しく仇っぽい美人で、蛇なんぞ怖いどころか、あべこべに大好きでふだん田圃みあさつては、青大將や藪かゞしや、私達の名も知らない、そつとするやうないろんなのを捕つて來て、其處らを

ニヨロ、ニヨロは遮はせて置いたのではあるまいか、そして自分は湯上りの立膝か何かで、スパリスパリと長煙管の煙を輪に吹いて居やうと云ふ柄のやうに思はれて仕方がない。若し左樣だとしたら、折角從妹の考へてゐる蛇責めも、何等の效を奏さない譯である。とは云へ加賀藩動の藩祖淺屋の局は、蛇責めの梅刑に所せられてしがき死に死んだと云ふ——。

兎に角蛇責めは決して劍持のいゝものではありますまい。その氣味の惡い蛇責めについて、またこんな話しもありました。

＝樽に一杯蛇を詰込で＝

それは今から七八十年も前の事でして、備後の國は尾の道藩から僅か一里足らずの今津村での出來事でした。

その今津の石井と云へば備後一圓切つての豪家で、人も知つた富家で、石井一門四十餘軒の總本家として威張つたものであつた。

四十餘した分別盛りの當主は金はある、おまけに名主樣ではあるし、村の者の信頼れと無く呼び捨てにして、何一つ思ひのまゝにならぬと云ふはなかつたが、唯一つ愛妾八重の態度が氣に喰はなかつた。元々金づくから無理と引き取つて、遮二無二云ふ事を聞かせたゞけのことだから仕方もないけれど、嫉ほれる身になつて見れば、如何にもごう慢で仕方が無い。古い言葉だけれど、可愛さ餘つて憎さが百倍とはよく云つたもの、とゞのつまり八重はいきり立つた當主の爲めに責め殺された。

新らしい四斗樽に蛇を一杯詰め込んだ其中へ泣き叫ぶ八重を突き入れ〳〵、上からピツタリ蓋をしたまゝ裏手の雜倉へ投り込んだきり、二日も三日も其儘にして置きました。旦那の不機嫌を恐れてか、家の下男下女は勿論の事、わけを知つた村の者も誰一人無茶を止めだてしようとはしませんでした。

＝血みどろの小蛇一匹＝

でも不思議なことには久しい間遠國に出てゐて、行衛不明になつてゐた八重の兄貴が、山伏姿でひよつこり石井家を訪づれた。そして妹に面會を乞ひました。

『不倫者の八重はせいばいした』

石井家ではけんもほろゝに答せつけようとはしませんでしたが、山伏の兄哥は或る日こつそり、例の雜倉へと忍び込み、祕密の四斗樽を押し開けた。中には既に八重の死骸は無かつたが血みどろに染つた樽の側から、ニヨロ、ニヨロと小蛇が一匹這ひ出しました。

南無や、アブラウンケンソワカ——とか何とか私には山伏のお經の文句は解りませんが、兄哥は一生懸命祈禱をこらした事でせう。唯た一匹だけ樽の中に殘つて居た其小蛇の頭を石で叩いて、それから得た血を竹の小筒に滴し込み、山伏の兄哥は眞言祕密の咒文をとなへながら石井家の屋敷まはりを三度廻つて、生き變り死變り、七生恨んで石井一家にたゝるやうにと祈禱した。そして何處へ行つたか、山伏の姿はつひぞ其處いらに見えなくなりました。

＝アレ〳〵其處に蛇が＝

それから間も無く石井の當主は氣がふれたと

云つて跣足裸足をして飛び廻ると云ふのではないけれど、出入りの番頭、家具屋が忙がしく出入つて來る日も來る日も盛をさし、魂が祟り替えた。

『真だの中へ蛇がもぐつた、ソラ障紙が血みどろだ！』

朝と無く夜となく斯う云ひ出したら埒らない、刀を抜いてザクリ、ザクリ眞新しい疊を突き刺し、襖を切つた。

『勿體ない、金持ならこそこちや……』

小前の者がひそ〳〵と陰言するまでもない、石井家の物入りは莫大なものでした、おまけに病人は闇絶なく出來て來る、もの、十年とたゝないうちに、さしもの大家も死に絶へた。

『八重の祟か知れない』

人知れず怖れをなした石井一家は親族會議を開いて、八重の怨靈かまつるべく一つのほこらを建てました。

[redacted]

＝白い蛇が幾何となく＝

おつかひひめは白い蛇！歸だと思ふ方は今年の遊覽旅行！瀬戸内海を廻り旁々尾の道から今津に立ち寄つて御覽なさい、お八重樣のほこらについてない、づんべらぼうの赤ん坊が產れたとしたら如何！ニヨロ、ニヨロと眞白な八重樣のおつかひひめと思ひ合せて、當の產婦でもない私までが、何だか斯う血上りでもしさうです。尤も私は人一倍の蛇嫌ひですけれど。（完）